

# 深浦円覚寺所蔵古典籍の意義

―津軽の寺院における「知のネットワーク」―

弘前大学人文社会科学部 渡辺 麻里子

はじめに

一、深浦円覚寺概観

二、真言聖教からみた都との「知のネットワーク」

(1) 海龍王寺 (奈良)

(2) 醍醐寺 (京都)

(3) 大覚寺 (京都)

三、修験道関係資料からみた津軽の「知のネットワーク」

(1) 大行院永朝

(2) 大円寺鑲堯

(3) 最勝院寿海

おわりに

はじめに

本稿では、深浦円覚寺が所蔵する古典籍の意義について、人と本をめぐる「知のネットワーク」という観点から考察するものである。

深浦円覚寺は、青森県西津軽郡深浦町にある真言宗醍醐派の寺院である。山号は春光山で、正式には「春光山圓覚寺」という。本尊は十一面観音で、津軽三十三ヶ所観音霊場の第十番札所である。

弘前大学人文社会科学部と深浦町とで連携して行っている深浦円覚寺古典籍保存調査プロジェクトでは、二〇一八年六月から、深浦円覚寺が

所蔵する古典籍資料を調査してきた<sup>①</sup>。その結果、深浦円覚寺には、約二〇〇〇点を超える多くの古典籍があること、そしてそれらが学術的に貴重な書物群であることが判明してきたのである。

なお、円覚寺という名は、青森県外の方だと鎌倉五山の円覚寺（臨済宗）を思い浮かべる方が多く、また青森県内の方にも伝わりやすいことがあるため、本プロジェクトでは「深浦円覚寺」という通称を使わせていただいている。

深浦円覚寺に所蔵される古典籍は、内容が多岐にわたるため、全体を分類して整理を行っている。『深浦円覚寺所蔵古典籍調査報告書』第一集（以下、一集）には、「深浦円覚寺所蔵古典籍の概要」<sup>②</sup>（以下、前稿）として、この二〇〇〇点の古典籍・聖教類の概要を述べ、特徴的な資料については、個別に解題を付けた。本稿では、その後の調査で判明した点を含め、真言聖教と修験道関係資料について、「知のネットワーク」という観点から、円覚寺所蔵本の意義を検討してみたい。

深浦円覚寺所蔵古典籍は、おおよそ以下の様に分類できる。

- (一) 真言関係聖教（含、古写本）
- (二) 歴代住持関係資料（含、修験関係資料、印信類）
- (三) 近世期和漢典籍
- (四) 明治期版行典籍
- (五) 朝鮮版（含、写本）
- (六) その他

本稿では、(一) 真言関係聖教と、(二) 歴代住持関係資料から、深浦円覚寺を基点とした「知のネットワーク」を考察する。

第一に、(一) の真言関係聖教についてであるが、深浦円覚寺は真言寺院であって、真言関係聖教が数多く所蔵されている。それらの中から、

京都や奈良の大寺院の旧蔵書であつたと思われる聖教類に注目し、都との「知のネットワーク」を考える。また第二に(二)の歴代住持関係資料のうち、第二十四世尊岸が蒐集した修験道関係資料に注目する。深浦円覚寺は、真言宗寺院であると同時に、修験道寺院でもあつたため、多くの修験道関係資料を所蔵している。中でも円覚寺第二十四世尊岸が蒐集した真言・修験関係書群は、様々な点で注目されるが、本稿では、尊岸への伝授者を検証しつつ、津軽の「知のネットワーク」を分析する。

なお、「知のネットワーク」というのは、例えば、先生と弟子という関係で学問や知識の伝授がながつたり、本をなかだちにして人がつながることをいう。現代は、インターネットなどを通して、知識のない相手や不特定多数に情報が伝えられるが、古典の世界では、知識はまず、人を介してつながっていくのである。

「知識」は大変貴重で重要なものであり、時には力を持った。簡単に人に教えるものではなく、「知識」が文字化され、凝縮された「本」は、大変貴重なものであつた。とりわけ重要な事柄が書いてあれば、さらに「秘密」の本、「大事」の本となり、特別な者にしか見ることも写すことも、また借りたり譲ったりすることは許されなかつたのである。

寺院資料調査では、寺院や僧侶の間に形成される、こうした知のネットワークに注目する。仏教の教えも、学僧間で、人づてに伝えられていく。書写されていく本は、内容が大事なのももちろんであるが、その本が、誰が持ち主だったのか、誰の本を写させてもらったのかなど、その「筋」(伝えられたルート)が重要なことも多いのである。

この度、深浦円覚寺に所在する古典籍・聖教を調査する中で、注目すべき様々な「知のネットワーク」が見出された。本稿では、(一)真言関係聖教、(二)修験道関係資料の二つの面から、それぞれの「知のネットワーク」を考えてみたい。

## 一、深浦円覚寺概観

深浦円覚寺は、現在、青森県西津軽郡深浦町に所在する。目の前が深浦の湊で、仁王門をくぐり、石の階段を上ったところに、本堂がある。

創建は古く、寺伝によれば、大同二年(八〇七)に坂上田村麻呂が創建し、貞観年間(八五九〜八七七)に、大和国の修験者円覚が開基とされている。また本尊の観音は、厩戸皇子作と伝え、三十三年に一度ご開帳をする。昨年度の二〇一八年七月にはその開帳が行われた。

円覚寺がある深浦は、古くから、蝦夷地・日本海岸・瀬戸内海方面とを結ぶ北国海運の寄港地で、江戸時代には、松前航路と下北航路との分岐点であつた。また弘前藩四代藩主津軽信政の時代には、青森・鰺ヶ沢・十三とともに、「四浦」の一つとされた。北前船の寄港地でもあり、その地形の特徴から「風待ち湊」とも呼ばれていた。古来様々な人が訪れ、菅江真澄なども深浦を旅し、記事を記している。深浦の歴史的役割は、前掲の瀧本論文に詳しいので参照いただきたい。

円覚寺はその深浦にあつて、海上交通を守り、航海の安全を祈願する寺院であつた。深浦円覚寺に所蔵される数多くの奉納絵馬は、航海の安全を祈願した人々、航海の無事を報告した人々の思いが込められている。荒れた海が描かれていたり、「持斎」といういわば祈禱師が描かれたものなど貴重な絵馬が多く、「円覚寺奉納海上信仰資料」として、日本遺産にも認定されている。その他、無事に航海をし終えた者たちが御礼に奉納した「まげ額」も著名である。

こうして、海上の安全を守った寺としての役割も大きいのだが、本稿で注目するのは、真言宗の寺院として、また修験道の寺院として、北東北において担った教学的役割についてである。現在の深浦円覚寺は、北東北における宗教の中核寺院として、様々な役割を果たしてきたのでは

ないかと思われるのである。

深浦円覚寺の宗派は、真言宗醍醐派三寶院流である。真言宗は弘法大師空海（七七四～八三五）が開いた日本仏教の宗派である。空海は、延暦二十三年（八〇四）に遣唐留学生として最澄らとともに中国へ渡り、長安で恵果から密教を学んだ。帰国後、弘仁七年（八一六）に高野山金剛峯寺を開創、弘仁十四年（八二三）には、嵯峨天皇より勅賜された東寺教王護国寺を、真言宗の根本道場とした。

深浦円覚寺本山の醍醐寺は、京都市伏見区に所在する真言宗醍醐派の総本山で、現在では世界遺産に認定されている大寺院である。貞観十六年（八七四）に理源大師聖宝が創建し、延喜七年（九〇七）に醍醐天皇の御願寺となった。三論教学の拠点であり、真言系修験道の中心である。醍醐寺が所蔵する約七万点の聖教・古典籍は、「醍醐寺文書聖教」として国宝に指定されている。円覚寺第二十六世義観は、明治十二年～十三年にかけて醍醐寺に行き、学問を修め、様々な典籍を書写し、学んでいる。

醍醐三寶院は、醍醐寺の子院の一つで、永久三年（一一一五）左大臣源俊房の子、勝覚の開創である。勝覚は醍醐寺の第十四世座主となる僧である。三寶院は、鳥羽天皇の御願寺であった。長い歴史の中で、成賢・憲深らは、三寶院の復興につとめ、賢俊・満濟には、足利氏が帰依した。三寶院の院主は、醍醐寺の座主となることが多く、子院の中で中心的な役割を果たしていた。また修験道当山派の本山として、大きな力を持った。本尊の弥勒菩薩像は快慶の作である。

深浦円覚寺は、古来修験道の寺院であり、また神仏習合の寺であった。古くは鳥居があったが、円覚寺の古図にその鳥居を確認することができると。木製の鳥居は、明治に撤去されたという。

円覚寺が北東北の宗教の拠点であったことは、薬師堂内厨子の存在が物語る。藤原基衡の寄進と伝える円覚寺薬師堂内厨子は、県内最古の建造物として、国の指定重要文化財となっている。豪華な装飾や細かな細

工が見事である。また薬師堂の棟札には、永正三年（一五〇六）の記があり、薬師堂の鰐口は、至徳三年（一三八五）の銘がある。これらの中世の遺物にも、今後注目していきたい。

## 二、真言関係聖教における都との「知のネットワーク」

深浦円覚寺が所蔵する古典籍のうち、まず、真言関係聖教について検討したい。真言関係聖教の中には、署名や蔵書印などから、旧蔵者が判明するものがあり、奥書からその本の来歴がわかるものがある。それらの中には、著名な大寺ゆかりの聖教がある。例えば、海龍王寺（奈良）、醍醐寺（京都）、大覚寺（京都）、金剛峯寺（和歌山）などである。以下、順に確認していきたい。

### （一）海龍王寺（奈良）

海龍王寺に関わる聖教は、二点ある。①『野沢法脈譜』（写二卷）と、②『三蔵法師袈裟図』（七条・九条、写二枚）である。

#### ①『野沢法脈譜』（写二卷）（一集解題【2】参照）

『野沢法脈譜』（写二卷）は、真言宗における（ア）小野流および、（イ）広沢流の法脈譜二軸である。本書は外題・内題など、書名を持たないため、円覚寺所蔵『円覚寺什器帳』に依って、『野沢法脈譜』と仮題しておく。奥書など、年代を特定できる情報がないが、紙や筆跡、その他の徴証から、鎌倉時代中期または後期のものと比定される。また筆跡や構成を同じくすることから、この二巻は一具の『野沢法脈譜』二軸であったものと想定される。内容は、（ア）小野流は、十五代仁海から二十一代実運まで、（イ）広沢流は、十二代金剛覚から十九代覚性の法脈を記す。

今回注目するのは、（イ）巻首に押された朱印に「海龍王寺」とある点である（写真1・2）。



海龍王寺は、奈良市法華寺町に所在する真言律宗の寺院である。<sup>⑥</sup> 古くは平城京内にあり、隅院・隅寺・角寺などと呼ばれた。創建は不詳ながら、天平七年（七三五）、唐から帰国した僧玄昉は、請来の経論を安置してこの寺に住したという。海龍王寺の堂舎は、天平三年（七三一）に建てられたとされ、壮麗な伽藍を誇った。現存する西金堂（重要文化財）と五重小塔（国宝）は奈良時代の建築である。

平安時代には興福寺の支配下となるが、鎌倉時代には、真言律宗の宗祖であり、西大寺流祖と仰がれる叡尊が、嘉禎二年（一二三六）から暦仁元年（一二三八）まで海龍王寺に住し、西大寺還住後の正応元年（一二八八）には戒律道場として海龍王寺の復興を手がけたことはよく知られている（『感身学生記』）。その後、信尊、興泉、元澄、光淳、高瑜と、海龍王寺からは西大寺長老を五名も輩出し、真言律宗の中でも筆頭格の寺院であったようである。

また、海龍王寺は聖教書写の場としても機能していたようで、海龍王寺での了性の『覚禪抄』書写活動は、元亨三年（一二三三）から正中二年（一二三五）まで行われたという。<sup>⑦</sup> 深浦円覚寺所蔵『野沢法脈譜』は、同寺所蔵『円覚寺什器帳』によれば、「但シ西大寺中興開山興正菩薩御真筆」とする。叡尊手沢かどうかは確証がないものの、こうした海龍王寺において聖教書写が盛んだった折に、ほぼ同時代・同環境のもとで、書写・伝授された可能性は、十分に想定されるのである。

深浦円覚寺所蔵『野沢法脈譜』にはこの「海龍王寺」の蔵書印が押されているのである。

## ②三蔵法師袈裟図（七条・九条） 写二通（二集解題【4】参照）

本書は、「袈裟曼荼羅」と言われるもので、袈裟の田相内に諸仏菩薩の像を安置した曼荼羅のことである。深浦円覚寺には、（ア）『七条袈裟図』と、（イ）『九条袈裟図』の二枚一具がある。包紙に包まれているが、その包紙の外側に「海龍王寺」と墨書があり、内側に、「宝暦八年（一七五八）

／海龍王寺高瑜長老和尚位」と、高瑜の自著と思しき識語がある（写真3・4）。高瑜（一六九五～一七六六、七十二歳）は、第五十六代住持となり、先述のように、西大寺長老を務めた僧である。この識語によれば、本書は、極楽寺法宣が、華藏院から借りた『七条袈裟図』を書写し、新たな一組を作り、もとの古い一組を海龍王寺の宝庫に納めたという。包紙には高瑜による宝暦八年の識語があるが、中の袈裟図は古いもので、直接年代を記してはいないが、紙や文字などの徴証から、鎌倉時代のものと比定される。

これら貴重な聖教が深浦円覚寺に至る経緯は未詳ながら、深浦円覚寺が醍醐派三寶院流の拠点寺院であり、北東北で宗教上、重要な核となる寺院であったことについて、こうした貴重な聖教を所持する意義と合わせて、今後、考えていく必要があるだろう。

## （2）醍醐寺（京都）

深浦円覚寺は、醍醐派三寶院流の寺院である。その本山である醍醐寺に関して、そのゆかりの聖教は、現在、二十点確認できる。醍醐寺との関係がうかがわれる点は以下の通りである。

（ア）醍醐寺の署名や箱番号の書入、蔵書印など、醍醐寺旧蔵を示す徴証がある

（イ）醍醐寺文海の奥書や署名を有する

（ウ）松橋流第二十祖堯円の署名を有する

これらの（ア）（イ）（ウ）に該当する二十点の聖教を以下に挙げておく。

## ①『大師御行状集記』写一冊（二集解題【1】参照）

- ・裏見返に「醍醐無量寿院」の墨書がある。
- ・醍醐寺文海の署名がある。

・奥書はないが、本の形状、文字などから、鎌倉期写本と判断される。

②『秘蔵記』写一冊（二集解題【1】参照）

- ・表紙に「丈六堂 無量寿院」「禅之箱」と墨書がある。
- ・表見返に『大師御行状集記』と同様の「文海」と署名がある。
- ・奥書はないが、本の状態から、鎌倉／南北朝期の写本と思われる。

③『秘密集 中』写一冊

- ・表紙に「丈六堂」と墨書がある。
- ・また康永二年（一三四三）、文海の奥書がある。
- ・奥書は文海の自筆と判断され、康永二年の写本と考えられる。

④『三昧耶戒序』写一卷（二集解題【2】参照）

- ・表紙見返に「文海」の墨書がある。
- ・奥書には「正和五年（一一三六）」とある。
- ・見返に「文海」の伝領署名があり、文海以前の写本である。
- ・書写奥書がないが、本の徴証から、鎌倉中期と判断される。

⑤『秘密要事集』『要鈔』『深秘要々』写三冊

- ・外題を「要鈔」「深秘要々」「秘密要事集」とする三冊一具の写本。
- ・三冊とも表紙に「十八帖之内」「索之箱」と、醍醐寺旧蔵本の情報を記す。（醍醐寺聖教の分類方法）
- ・奥書はないが、本の状態から鎌倉時代写本と思われる。

⑥『御遺告秘決』写一冊（本書二集、阿部氏論文参照）

- ・包紙に「索之箱」と墨書。
- ・表紙に「索之箱」「松橋之」と墨書がある。

・奥書はないが、豆糊使用の粘葉装のため、鎌倉期写本と推定される。

⑦『妙伝抄』写三冊

- ・表紙右上に「昂之箱」と墨書。
- ・表紙右下に「上醍醐 丈六堂」と墨書。
- ・奥書はないが、中世の漉き返し紙を使用。室町期のものと判断する。

⑧『灌頂私記』写一冊（一集、永村氏論文参照）

- ・表紙に「愛之箱」「松橋之」と墨書がある。
- ・奥書に「永禄六年（一五六三）」とある室町期写本である。

⑨『秘鈔聞決』写一冊

- ・表紙右上に「香之箱」、右下に「松橋」と墨書がある。
- ・横型の写本三冊で、紙背には応永の年号がある。
- ・奥書はないが、南北朝から室町期を思わせる写本である。

⑩『座右記』写一冊

- ・表紙右上に「業之箱」、表紙右下に「堯円」と墨書がある。
- ・「慶長十一年（一六〇六）」と記した紙背がある。

⑪『秘鈔口決』卷十四・十五、写一冊

- ・表紙右上に「十八帖之内／香之箱」、右下に「醍醐寺無量寿院常住」と墨書がある。
- ・扉にも「十八帖之内／無量寿院」と墨書がある。
- ・奥書はないが、本の状態から江戸期の写本と思われる。

⑫『真言二字義』刊一冊

・『真言二字義』は版本である。

・表紙に「醍醐寺無量寿院」「堯円」と墨書がある。

⑬『当年星供次第』写一冊、

・表紙に「松橋経蔵」「堯円」の墨書がある。

・奥書はないが、本の状態から、江戸期の写本と思われる。

⑭『法華経事』写一冊

・表紙に「松橋経蔵」「以或本写之三冊之内」「歌」と墨書がある。

・寛永五年（一六二七）の奥書があり、江戸前期の写本と思われる。

⑮『八千枚部類抄』写一冊（一集、永村氏論文参照）

・表紙に「堯円」の署名があり、「嬉」と旧蔵箱名の墨書がある。

⑯『阿字観』写一冊

・表紙に「純音」「無量寿院」と墨書がある。

・奥書には「享禄五年（一五三二）／筆写顕正」とある。

・本の状態から、江戸時代の写本と判断される。

⑰『新集俗像儀軌』写二冊

・表紙に「索」と墨書がある。

・本文冒頭に、「醍醐寺松橋密蔵」の墨印がある。

・「享保二十年（一七三五）／元雅」の奥書がある。

・本の状態から、享保二十年の時代の本と考えられる。

⑱『悉曇口決』写二冊

・奥書はないが、江戸期の写本と判断される。

・冊の冒頭に「醍醐寺松橋常住」の朱印が押される。

⑲『大師執筆法』写一卷（二集解題【3】参照）

・本文冒頭に「松橋密蔵」との墨書がある。

・「享保十三年（二七二八）／沙門真源」の奥書がある。

⑳『大毘盧遮那成仏神変加持経 卷第一』刊一卷

・末尾裏に「丈六堂聖教宮之内」と墨書がある。

・「文明十二年（二四八〇）／俊慶」「明応八年（二四九九）／宗典」

「文亀三年（二五〇三）／弘宣」の奥書あり。

以上、二十点の醍醐寺の旧蔵を示す署名や蔵書印のある本を列举した。  
整理すると以下の様になる。

I 「醍醐寺無量寿院」の墨書があるもの

・『大師御行状集記』『秘蔵記』『真言二字義』の三点

II 「丈六堂」の墨書があるもの

・『秘蔵記』『秘密集』『妙伝抄』の三点

III 醍醐寺の旧蔵箱名を記したもの、以下八点

・「索之箱」…『秘密要事集』『御遺告秘決』『阿字観』

・「昂之箱」…『妙伝抄』

・「香之箱」…『秘鈔聞決』

・「業之箱」…『座右記』

・「愛之箱」…『灌頂私記』

・「禅之箱」…『秘蔵記』

IV 文海の奥書や署名を有するもの

①『大師御行状集記』、②『秘藏記』、③『秘密集 中』、④『三昧耶戒序』の四点がある。

文海（一二九三～一三六一）は、醍醐寺報恩院隆舜の付法で、上醍醐の釈迦院に住した。醍醐寺には、文海が書写した法会の記録や聖教が残されていることである。この文海の自筆署名があれば、その本はそれ以前の本という事になる。

一集では、三点と報告したが、今回新たに一点（④『三昧耶戒序』）が見つかったため、四点となった。

V 堯円あるいは「堯」の署名を有するもの

⑥『御遺告秘決』、⑦『妙伝抄』、⑩『座右記』、⑫『真言二字義』、⑬『当年星供次第』、⑮『八千枚部類抄』の六点。その他、深浦円覚寺には、『二行禅師字母表』（大覚寺において長助が書写）にも「堯」の署名がある。

堯円（一五七〇～一六三六）は、一雅、大納言僧正とも言われる。東寺堯雅法務の室に入り、出家受戒し、後に伝法職位を受けて、松橋流第二十祖となった学匠である。寛永三年（一六二六）十二月には東寺第九十代法務となり、大僧正に任ぜられた。また閻魔堂別当を兼ねた。この堯円の署名がある本が、現在、円覚寺には七点ある。（一集解題【3】を参照。）

VI 蔵書印を有するもの、以下の二点である。

- ・「醍醐寺松橋常住」の朱印…⑬『悉曇口決』
- ・「醍醐寺松橋密蔵」の墨印…⑰『新集俗像儀軌』

今年の調査では、醍醐寺旧蔵本と思われる本が、新たに三点見つかった。④『三昧耶戒序』、⑰『大師執筆法』、⑳『大毘盧遮那成仏神変加持経 卷第一』の三点である。このうち、④『三昧耶戒序』、⑰『大師執筆法』については、本書第二集の解題編に記したので参照いただきたい。

### （3）大覚寺（京都）

『二行禅師字母表』（写一冊）は、元亨二年（一三二二）に大覚寺で書写した奥書を持つ。

大覚寺は、京都市右京区嵯峨大沢町にある寺院で、古義真言宗大覚寺派大本山。山号は嵯峨山。通称は嵯峨御所・大覚寺門跡という。本尊は五大明王。はじめ嵯峨天皇の離宮であった嵯峨院を、貞観十八年（八七六）二月二十五日に嵯峨天皇の皇女正子内親王（淳和太后）が寺に改め大覚寺と号したのがはじまりで、開山は淳和天皇の第二子の恒寂入道親王（恒貞親王）であった。親王は阿弥陀如来像と諸経論を安置するとともに、定額僧十四口を置くなど寺院としての組織を整えたという。

元慶五年（八八一）八月、勅により山城国葛野郡二条大山田の地三十六町が大覚寺に施入され寺地が定まり、同年十二月には、付近に存在した嵯峨上皇・檀林皇后（橘嘉智子）・淳和太后の三陵と檀林寺の管理を任され、それらを検校するために公卿別当が置かれた。その後、二世寛空、三世定昭と次第するが、天元年中（九七八～八三）に定昭が興福寺内に一乗院を創建したために、文永五年（一二六八）までの二百八十余年間、一乗院主が大覚寺を兼帯した。

鎌倉時代には後嵯峨・龜山・後宇多の三上皇が当寺に入住した。特に後宇多上皇は延慶元年（一三〇八）に寺内の蓮華峰寺を仙洞御所（嵯峨御所）として院政を行い、また元亨元年（一三二二）に諸堂の造営・整備に尽力したので大覚寺中興の祖と呼ばれる。以来この皇統の上皇や皇子が当寺に入住したため、この皇統を大覚寺統と称した。本書は、元亨



二年の書写で、この頃のものである。

大覚寺統は、南北朝時代に南朝として北朝（持明院統）と皇位継承をめぐる対立を続けたが、明德三年（元中九、一三九二）に南北朝の和議が成立し、南朝の後龜山天皇は当寺御冠の間で北朝の後小松天皇に神器を譲り、応永元年（一三九四）当寺内の小倉御殿に隠棲した。応仁二年（一四六八）の応仁の乱によって伽藍が焼失し、一時荒廃したが、織田信長の天正三年（一五七五）・同四年の二度にわたる寺領寄進や、豊臣秀吉による天正十三年・同十六年の寺領寄進によって復興された。

江戸時代にも徳川家康の寺領の安堵や、後水尾天皇の寄進などがあり門跡寺院としての伽藍が整備された。明治維新の際には一時無住となったが、明治六年（一八七三）神海が住持し復興に努めた。同三十三年独立して古義真言宗大覚寺派を称したが、大正十四年（一九二五）高野山・御室両派と連合して古義真言宗と改称した。

本書の表紙には、堯円の署名がある。堯円（二五七〇～一六三六）は、松橋流第二十祖で、東寺長者第百九十世である。

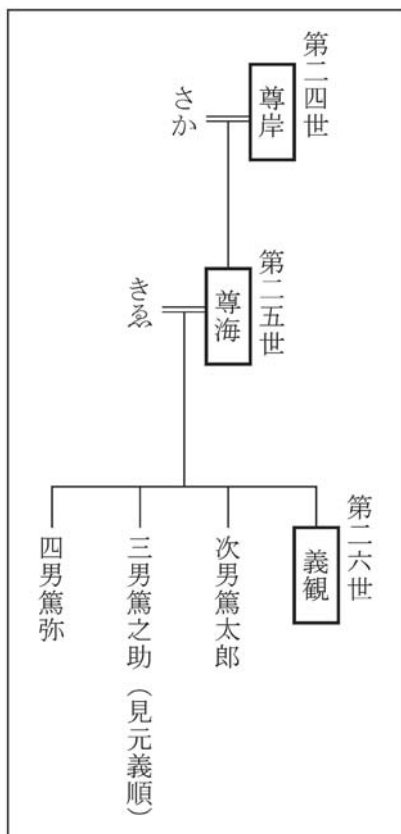
以上のように、深浦円覚寺所蔵本の中から、海龍王寺（奈良）、醍醐寺（京都）の旧蔵書とわかるもの、また、大覚寺（京都）の書写奥書を持つものを確認してきた。

今のところ、これらの真言聖教が、なぜどのようにして深浦円覚寺の所蔵となったのか、その経緯は未詳である。しかしこうして都の知識が深浦円覚寺に蓄積していることは、深浦円覚寺が、地方における醍醐派三宝院流の寺院として存在感があったこと、また北東北の基幹的な寺院として、「知のネットワーク」の拠点であったことなどを想起させる。北東北における深浦円覚寺の役割を考える時に、重要な意義があると考えている。

### 三、修験道関係資料からみた津軽の「知のネットワーク」

次に、修験道関係資料を検討したい。円覚寺の修験道については、修験宗の復興をはかり、『日本大蔵経』修験道章疏の刊行に尽力した第二十六世義観が著名であるが、この度、円覚寺の聖教調査によって、義観の資料も多く見つかったが、義観の祖父、第二十四世尊岸にこれまで全く知られておらず、注目すべき資料が多数見つかった。一集では、『修験道峯中火堂書』『如意輪念誦次第』（甲）、『如意輪念誦次第』（乙）、『妙見大菩薩法』の四点を紹介し、義観より二代前に、修験関係資料の蒐集が行われていたことを指摘した。

本稿では、尊岸が、具体的に津軽のどの寺院、どの師匠から伝授を受けたかに注目し、尊岸を通じた津軽の「知のネットワーク」を考察する。尊岸は円覚寺第二十四世、義観は第二十六世、尊岸は義観の祖父である。円覚寺第二十四世智教房尊岸（二八〇三～一八七二、七十歳）は、もと藤代仙寿院の生まれで、円覚寺二十三世に子がなかったために、十九歳の時に養子に迎えられたと伝えられている。妻さかとの間に生ま





れた子が第二十五世尊海である。尊岸は、藤代時代には、名を永礪と言った。円覚寺聖教からは永礪の署名のある聖教・典籍も見出すことができた。その後、尊岸と改名した年は不詳ながら、十九歳には尊岸を名乗っている。

さて尊岸は、様々な種類の聖教・古典籍の書写を行っていた。内典・外典の広範囲に渡っている。中でも今回注目したいのが、密教関係と修験道関係資料の書写蒐集集である。その数は、約三百点もある。この数は、一集では、二五〇点を越える」と記したが、その後の調査でさらに増えた。また、印信・切紙類も残っていたのである。印信・切紙類は、本報告書で原克昭氏が概要とリストを掲載している。

尊岸が書写した一群の聖教を分類したところ、段階的に書写し、本人なりの「叢書」を形成した跡がうかがえた。義観は祖父の蒐集を引き受けたものと考えられる。

尊岸本は、約十五糎四方の袋綴本、縦八糎×横十五糎程度の小型横型本、縦二十糎×横十五糎ほどの縦型本など、数種類ある。

また印信類を整理している中で、『諸尊法伝授切紙目録』が発見された（二集解題【4】）。尊岸は、文政四年～五年、一九歳～二〇歳の時に、師の永朝から様々な伝授を受けた。それをまとめたのがこの目録であった。この目録に記される題名は、すべてではないが、いくつかのものが現存する「切紙」と対照できた。『龍神秘法』（二集【解題5】）や『乗船大事』（二集【解題6】）などである。

次に興味深いのは、尊岸の書写活動である。尊岸本は、同じ内容を複数回転写していることがわかった。改めて全体を整理して判明したのは、文政四年～五年、一九歳～二〇歳の時に伝授を受けた後、その切紙をすぐに書写し、冊子にしていることである。またそれを、五十九歳から六十四歳にかけて、近い種類のものはひとまとめにして、再度、書写し直しているのである。斐紙（雁皮紙）で、ほぼ正方形の形の冊子状に

まとめられた書は、尊岸の叢書（集成本）の様相であった。二集の解題でも、【13】『仁王経法』（甲）を再写したものが【14】『仁王経法』（乙）、【16】『修験宗神道神社印信』（甲）を再写したものが【17】『修験宗神道神社印信』（乙）になっている。

それでは次に、尊岸の手沢本から、尊岸が伝授をうけた師を挙げ、それぞれ確認してみたい。

#### （1）大行院永朝（松峯山長永寺Ⅱ大行院）

まず、大行院永朝についてである。永朝は、松峯山長永寺大行院の住僧である。尊岸は師匠として永朝から様々な修法を受けている。大行院は、明治の修験道禁止の影響を受け、現在は廃寺となっていることから、資料が少なかったが、この度、尊岸の資料が明らかになったことで、大行院の幾ばくかについて、資料で追えるようになった。

最も早くその名が確認できるのは、『如意輪念誦次第』（尊岸一五）である。四点合写している中で「初加行作法」の奥書に、「文政元年（二八一八）授与智教（Ⅱ智教房尊岸、十六歳）／法印永朝示之」とある。また『諸伝授切紙目録』写二通は、永朝が、文政四年と五年に尊岸に諸法を伝授したその目録である（二集解題【4】参照）。

他にも、永朝から尊岸への伝授を示す資料は多数あるので、以下に具体的に例を挙げてみたい。

#### a 『龍神秘法』（二集解題【5】）

文政五<sub>壬午</sub>年八月吉日

授与 尊岸

法印永朝示之

#### b 『変成男子極秘』（二集解題【8】）

文政五<sub>壬午</sub>年（一八二二）八月 受与 尊岸

法印永朝示之

c 『諸尊法伝授切紙目録』(二集解題【4】)

文政四年<sup>辛巳</sup> (一八二二)十一月吉日 授与役門尊岸  
伝師 伝燈大阿闍梨法印永朝示之

d 『修験宗 神道神社印信』(二集解題【16】【17】)

文政七年<sup>甲申</sup>  
三月十三日書写伝授津軽深浦

春光山智教房 尊岸

松峯山大先達法印永朝示之

e 『兵法虎之巻』(二集解題【10】)

文政五<sup>壬午</sup>年十月朔日役門受者永朝

津軽大円寺住阿闍梨法印鏤堯<sup>示之</sup>

文久二<sup>壬戌</sup>年八月吉日深浦受者春光山円覚寺謹而伝写之

津軽松峯山大行院阿闍梨法印永朝師御本書<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>伝写之

永<sup>ク</sup>当院<sup>ノ</sup>什宝<sup>ト</sup>成<sup>テ</sup>他見無用一子相伝也

a 『龍神秘法』、b 『变成男子極秘』では「法印永朝」、c 『諸尊法伝授切紙目録』では、「伝燈大阿闍梨法印永朝」と記される。

d 『修験宗 神道神社印信』に「松峯山大先達法印永朝」、同じくe 『兵法虎之巻』に「津軽松峯山大行院阿闍梨法印永朝師」と記されるため、永朝の所在が判明する。松峯山とは、松峯山長永寺大行院のことである。大行院は、弘前にかつて所在した修験寺院で、本山は醍醐三宝院である。山号は松峯山長永寺という。正保元年(一六四四)三代藩主津軽

信義の時に、領内の山伏を支配する修験司頭に任ぜられ、寺領三〇石を給せられた。もと鼻和庄八幡郡にあったが、承応二年(一六五三)に新寺町報恩寺の隣接地に移した。その後、宝暦四年(一七五四)に、大行院は常源寺の坂の所、現在の天満宮の地に移転したという。永朝が尊岸に伝授した時代は、大行院は、現在の天満宮の地であったと思われる。

このように尊岸は多くの伝授を永朝から受けるが、では永朝の師は誰なのであろうか。e 『兵法虎之巻』には、「津軽大円寺阿闍梨鏤堯」から永朝への伝授が記される。またf 『止風雨法』(尊岸二四、写真5〜7)やg 『当年星供次第』の奥書には、密乗院朝胤↓永朝↓尊岸の伝授が示される(写真8〜9)。

f 『止風雨法』(尊岸二四)<sup>⑧</sup>

于時文化十一<sup>甲戌</sup>年八月廿日 授与永朝

密乗院権僧正朝胤法印

文政五<sup>壬午</sup>年五月九日 授与尊岸

大先達法印永朝

g 『当年星供次第』(尊岸一三二)

文化十一<sup>甲戌</sup>年八月廿日 受者永朝

密乗院権僧正朝胤以御本写之了

文政四<sup>辛巳</sup>年十月吉日 受者尊岸

伝燈大阿闍梨法印永朝

以御本写之了

f 『止風雨法』では、文化十一年(一八一四)八月二十日に、朝胤法

印から永朝へ授け、それを文政五年（一八二二）に永朝が尊岸に授けている。また g『当年星供次第』では、永朝が朝胤から伝授され、永朝は尊岸に授けていることがわかる。

大行院での永朝について、h『走人返秘大事』（尊岸一二八）には、興味深い記事がある。

h『走人返秘大事』（尊岸一二八）

御本口云

寛政四<sub>壬子</sub>五月卅日 阿闍梨 性善

沙門 剛憲

余資 成尊

余資 宥實

授者 鑲堯

御本口云

寛政十一<sub>己未</sub>年五月下旬

阿闍梨宥實法印

于時

文化十一年九月十三日当寺八世永朝代

不思議<sub>ニ</sub>一宗之内<sub>ヨリ</sub>出<sub>タリト</sub>云云

于時

文政五<sub>壬午</sub>年五月十一日

尊岸

i『深秘法大事 五通』（尊岸二七）

于時

文化十一年九月十二日松峯山法印永朝代

不思議<sub>ニ</sub>一宗之内<sub>ヨリ</sub>出<sub>タリト</sub>云云

他見無用可秘々々

于時

文政五<sub>壬午</sub>年五月十一日 授与 智教房 尊岸

法印永朝示之

h『走人返秘大事』の奥書に、「当寺八世永朝代」に、この本が宗内から出たと記される（写真10～13）。この「当寺」は、本書を後に尊岸自身が転写した、i『深秘法大事』の「走人返秘大事」の奥書の当該部分（写真14・18・19）では、「松峯山法印永朝代」とあるため、これらの情報から、永朝は松峯山長永寺大行院の八世であったと考えて良いと思われる。こうして、尊岸は、大行院永朝から多くのことを学ぶのだが、尊岸と大行院との関係を示す資料を一つ紹介したい。

j『十三仏合次第』（尊岸四五）

文政五<sub>壬午</sub>年五月

弘前

松峯山長永寺勤学之砌書写之上伝授之

智教房尊岸

伝師大先達伝灯大阿闍梨法印永朝示

于時天保六<sub>乙未</sub>年 津軽深浦澗口

五月十日 観音別当

春光山円覚寺現住

大越家尊岸 謹而書写之

j『十三仏合次第』の奥書によれば、尊岸は松峯山長永寺で「勤学」をし、その間に書写をし、伝授を受けたとある（写真15～17）。尊岸の修学的一端がうかがわれる資料で、書写伝授の実態が明らかとなる。

以上、長々と記したが、大行院については、現在資料の少ないところであるが、こうして尊岸の記した聖教の中から、津軽の寺院について、貴重な情報を得ることができるのである。

## (2) 大円寺鑲堯

次に、大円寺鑲堯についてである。尊岸の書写本・手沢本には、鑲堯の名がしばしば見られる。

### k 『理趣経法』写一冊

文政八<sup>乙</sup> 酉年三月 授与尊岸

伝師 法印鑲堯

慶応元<sup>乙</sup> 丑年五月廿九日

津軽深浦円覚寺法印尊岸

行年六十三歳<sup>ニ</sup>再写之<sup>テ</sup>

k 『理趣経法』では、尊岸は鑲堯からも伝授を受けていることがわかる。また『仁王経法』(二集解題【13】【14】)の奥書には「文政五年(一八二二)五月十八日津軽深浦澗口観音別当 春光山円覚寺大善院後住 智教房尊岸伝写之」とあり、「大円寺鑲堯法印示之」と、鑲堯が二十歳の尊岸に伝えたことを記す。

玄識房鑲堯は、後に最勝院第二十七世になる僧侶であるが、福井敏隆氏の御教示によると、その経歴に不明な点があり、史料から追えない部分があるとのことである。福井氏が、『国日記』の記載から、鑲堯の経歴を確認した貴重な情報を、本報告書のためにご提供下さった。本稿末に、ご了解を得て「資料」として掲載したのでご参照いただきたい。

ほとんどの年について経歴が確認できる中で、大円寺の住職であった

時期の確証がなかったとのことであるが、尊岸の資料から辿ると文政四年(一八二二)と文政五年に「大円寺鑲堯法印」として尊岸に伝授していることから、この時、大円寺にいたことが確認できる。この他、『十二合掌六拳之事』(写真20頁22)の奥書にも、「文政五年壬午年正月廿二日／大円寺住 大阿闍梨法印鑲堯師／智教房尊岸」とあり、鑲堯が文政五年正月に大円寺に住していたことが明確に示される資料が見つかったのである。

このように、鑲堯は尊岸の師僧であるため、尊岸の資料から、直接的に鑲堯の事跡が確かめられ、また尊岸を基点に、人づてに、津軽の学僧の動きや、寺院の状況など、津軽の寺社をめぐる貴重な資料たり得るのである。ここまで、尊岸の資料をもとに、尊岸の師として、松峯山長永寺大行院八世永朝と尊岸の関係、また大円寺鑲堯と尊岸の関係を見てきた。ここで別の資料から、さらに注目すべき関係を見てみよう。

### 1 『兵法虎之巻』(尊岸一一、二集解題【10】)

文政五<sup>壬</sup> 午年十月朔日役門受者永朝

津軽大円寺住阿闍梨法印鑲堯<sup>示</sup>之

文久二<sup>壬</sup> 戌年八月吉日深浦受者春光山円覚寺

謹而伝写之

津軽

松峯山大行院阿闍梨法印永朝師<sup>ノ</sup>

御本書<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>伝写之永<sup>ク</sup>当院<sup>ノ</sup>什宝

成<sup>テ</sup>他見無用一子相伝也

文政五<sup>壬</sup> 午年十月吉日

津軽深浦大円寺住阿闍梨法印鑲堯

以本書伝授之上是写書畢



役門 永朝謹書

文久二<sup>壬戌</sup>年八月廿二日

津輕大行院十世法印明尊ノ以本書

謹而伝写之津輕深浦

春光山円覚寺現住

六十歳 尊岸

これを見ると、鑲堯が永朝（大行院八世）に授け、尊岸は大行院十世明尊から伝授されている。尊岸の師永朝もまた鑲堯に学んでいる点には注目される。

### （3）最勝院寿海

m『聖天講式』写一冊（尊岸二九）には、以下のような奥書がある。（二集解題【15】参照）

此講式

岩木山百沢寺々庵福寿坊住<sup>ニ</sup>テ

金剛山最勝院

院代法船坊寿海書写之上被贈下

永<sup>ク</sup>於春光山奉読誦後代エ授与之

慶応三<sup>丁卯</sup>年菊月吉祥日

津輕深浦春光山円覚寺 尊岸

これには、岩木山百沢寺の寺庵福寿坊に住したこと、金剛山最勝院の院代法船坊寿海が書写し贈られたこと、春光山（円覚寺）では永く読誦し、後に授けたなどということが記される。慶応三年（一八六七）尊岸は六十五歳であった。

ここまで、尊岸の書写資料から、（1）大行院永朝、（2）大円寺鑲堯、

（3）最勝院寿海について、粗々述べてきたが、この他にも、最勝院妙海、松前阿吽寺寛山（二集解題【11】）など、尊岸への直接の伝授だけでも様々に確認できる。尊岸の資料は、津輕一円の学僧のネットワークについて、多くの情報を提供してくれるのである。

また、同様に、貴重な資料となるのが「印信・切紙」類であるが、これについては、本集次稿に、原克昭氏が整理し、まとめているのでご参照いただきたい。この印信・切紙と、本稿で述べた尊岸本は、密接な関係があるので、今後はこれらを集成した分析も行なっていきたい。

### おわりに

深浦円覚寺所蔵聖教は、色々な点から貴重であり、様々な情報や可能性を提示している。今回注目したのは、「知のネットワーク」の拠点たる円覚寺の役割である。

真言宗寺院の、中世近世の北東北での展開は、あまり研究がなされていないところである。とりわけ聖教があまり残っていないと思われることもあったかと思う。今回発見された真言聖教は、いずれも来歴の不明なものばかりであるため、今後どのように位置づけるか、慎重に検討する必要があるが、それでも、今回、中世写本を含む真言聖教が多数発見されたことは、今後、真言宗寺院の修学活動を考える際に、重要な意義があると考えられる。津輕には、中世に「談義所」も確認されており、中世から近世にかけての、都（中央）との「知のネットワーク」の存在は、大いに可能性があるのである。

また尊岸の修学は、津輕一円の寺院で行われていた。尊岸の書写資料には様々な意義がある。とりわけ、修験寺院は廃寺になるなどして、現在資料が求められない寺院も多い。尊岸は、津輕一円の寺院、例えば、最勝院、大円寺、大行院、百沢寺などの僧に学んでいることがわかって

きた。つまり尊岸の師やその師を基点として、津軽一円の寺院や学僧の知的交流が解明できる可能性が感じられる。今回いくつか示した、永朝や鑲堯といった僧侶の活動について、尊岸の資料から辿れることが多くありそうである。深浦円覚寺が所蔵する尊岸書写本は、尊岸という学僧の修学内容に留まらず、津軽における学問の交流、「知のネットワーク」を解明する、貴重な情報を与えてくれるのである。

なお尊岸の修学内容は、仏教に留まらない。密教や、修験道の他にも、和歌や地域の歴史なども学んでいる。歴史では、『津軽一統誌』の書写もしており、文学関係では、和歌などにも造詣が深く、雅号を「松月」とし、和歌の方面でも多くの典籍を書写伝授している。こうした和歌などの教養は、長男の第二十五世尊海に引き継がれている。また聖教は、二十六世義観に引き継がれていく。

以上、深浦円覚寺所蔵古典籍調査から、津軽と中央の「知のネットワーク」、また津軽における「知のネットワーク」について検討してきた。ここに述べたことは円覚寺が所蔵する膨大な資料のうちのごく一部にすぎない。今後、個々の典籍についてはより深い分析を進めつつ一方で、全体を見渡した位置づけを検討していきたい。まだまだ不明な点が多い、中央との「知のネットワーク」や津軽に広がる「知のネットワーク」について少しずつでも解明していきたいと考えている。

#### 〔注〕

- (1) 深浦円覚寺古典籍保存調査プロジェクトの経緯は、拙稿「深浦円覚寺古典籍保存調査プロジェクト活動報告」(『深浦円覚寺所蔵古典籍調査報告書』第一集、二〇一九年三月)に詳しく述べた。
- (2) 拙稿「深浦円覚寺所蔵古典籍の概要」(『深浦円覚寺所蔵古典籍調査報告書』第一集、二〇一九年三月)による。

(3) 坂上田村麻呂(七五八〜八一二)は、平安時代初期の武将。蝦夷

夷征討で功績をあげた人物である。陸奥出羽按察使兼陸奥守であり、鎮守將軍、征夷大將軍を務めた。京都清水寺を創建、『清水寺縁起絵巻』第八段には、鎧甲冑姿で延鎮に戦勝祈願をする姿が描かれている。現在の清水寺境内には、蝦夷の武将アテルイとモレの碑がある。

- (4) 現在の御住職は、歴代住持を数えて、第二十八世である。
- (5) 永村眞氏は、鎌倉中期と比定されている。以下、醍醐寺関係聖教の年代比定については、永村眞氏のご教示を得た。

- (6) 海龍王寺については、原克昭「解題【2】『野沢法脈譜』」(『深浦円覚寺所蔵古典籍調査報告書』第一集、二〇一九年)、渡辺麻里子「解題【4】三藏法師袈裟図(七条・九条)」(同書)、福山敏男『奈良朝寺院の研究』(高桐書院、一九四八年)、『大和古寺大観』五(岩波書店、一九七八年)を参照。

- (7) 森由紀恵「東大寺蓮乗院と『覚禅鈔』」(『古代学』一〇、奈良女子大学古代学術研究センター、二〇一八年二月)参照。

- (8) 尊岸二四は、所蔵者整理番号である。以下同じ。

- (9) 尊岸から義観へは、二集解題【19】も参照。

#### 〔謝辞〕

調査を通して、円覚寺や地域の寺社、僧名などについて、海浦由羽子氏には多くの御教示を賜りました。改めましてここに御礼申し上げます。また福井敏隆氏には、鑲堯に関して、貴重なご助言を得ました。フォーラムの発表及び本報告書には、鑲堯の情報を快くご提供下さいました。心より御礼申し上げます。





写真2

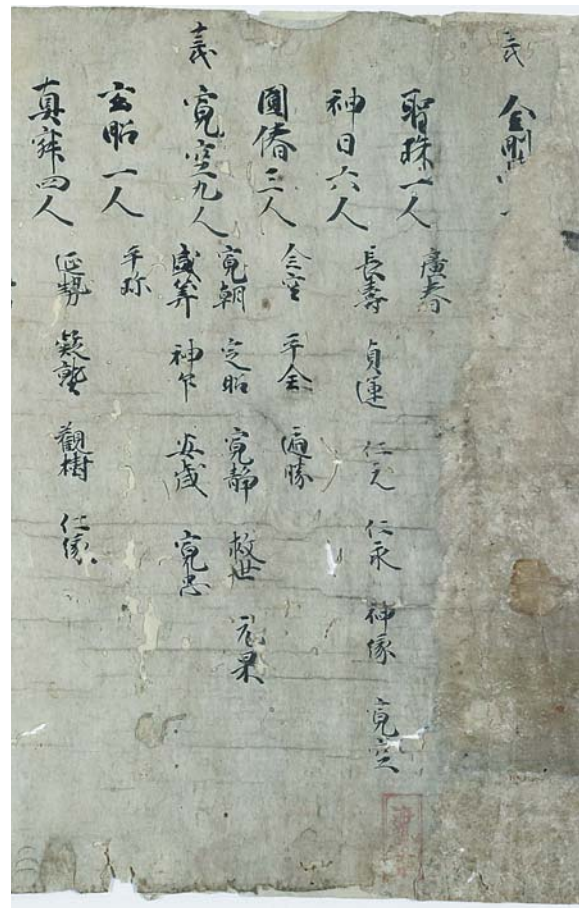


写真1

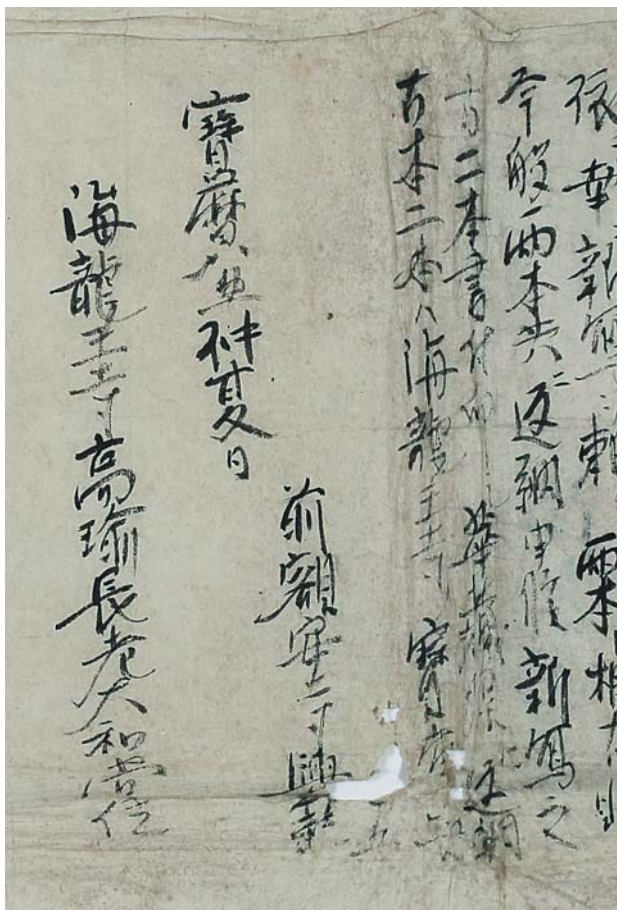


写真4

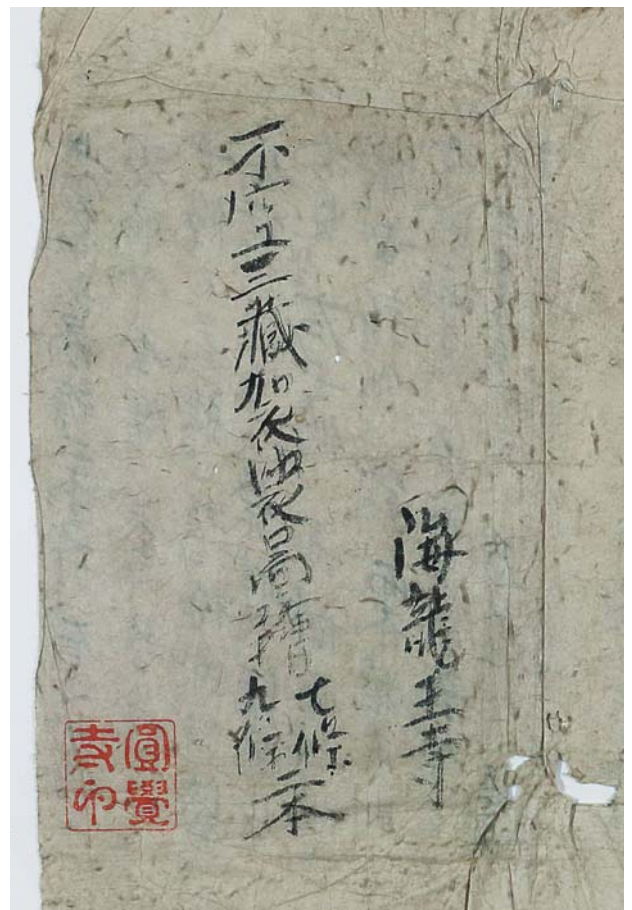


写真3



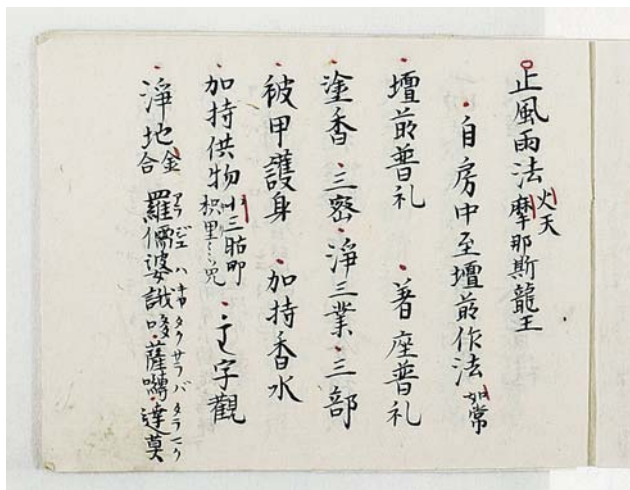


写真6

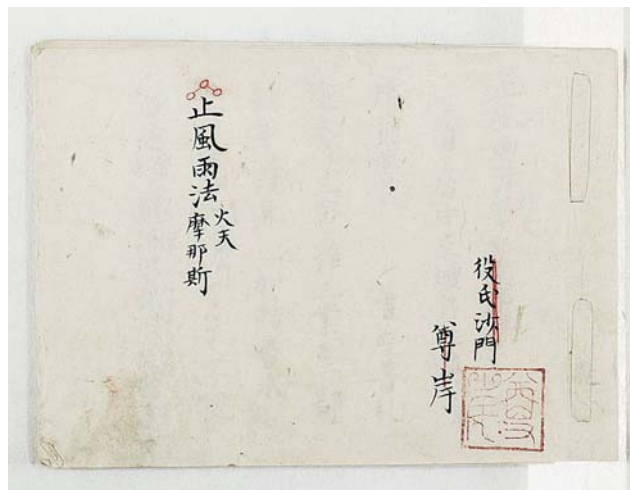


写真5



写真8

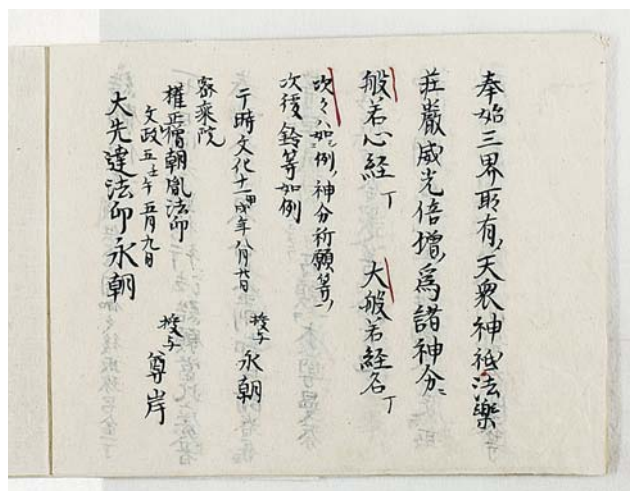


写真7

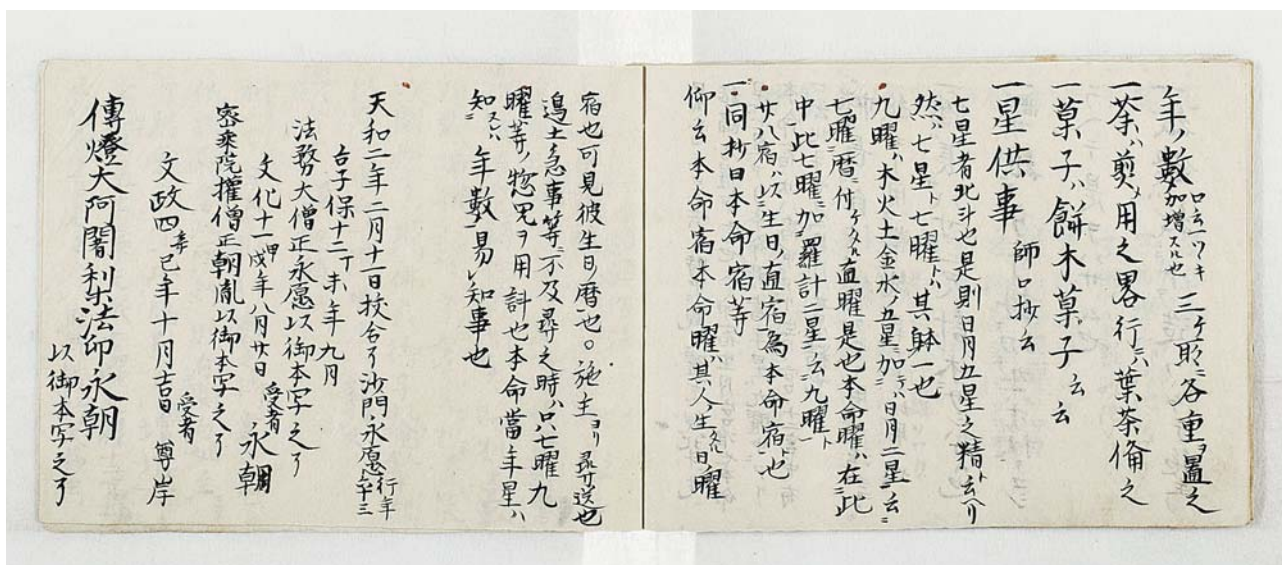


写真9



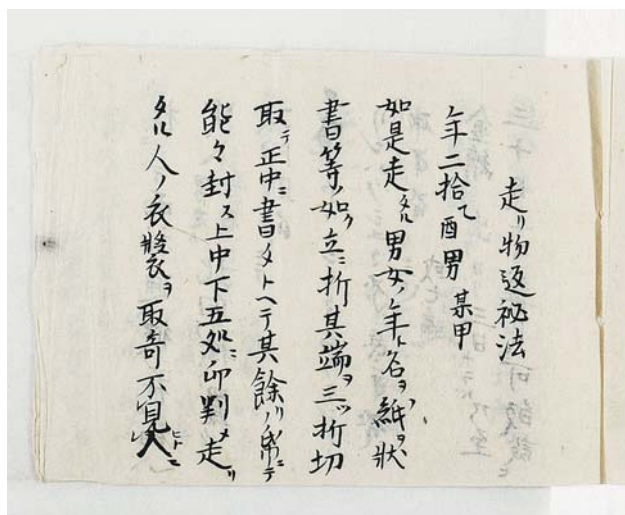


写真 11

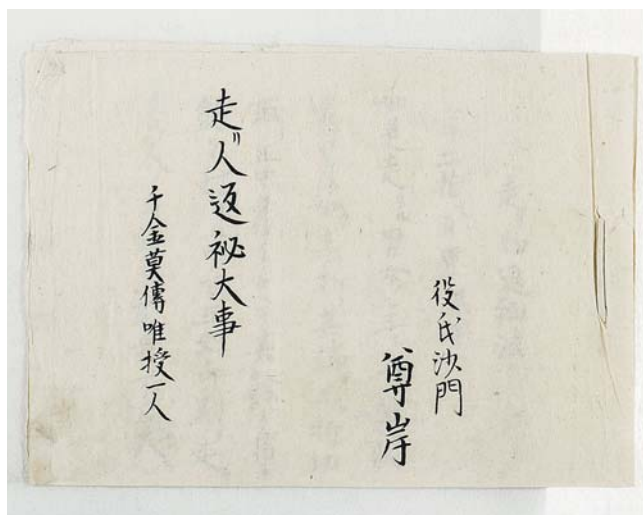


写真 10

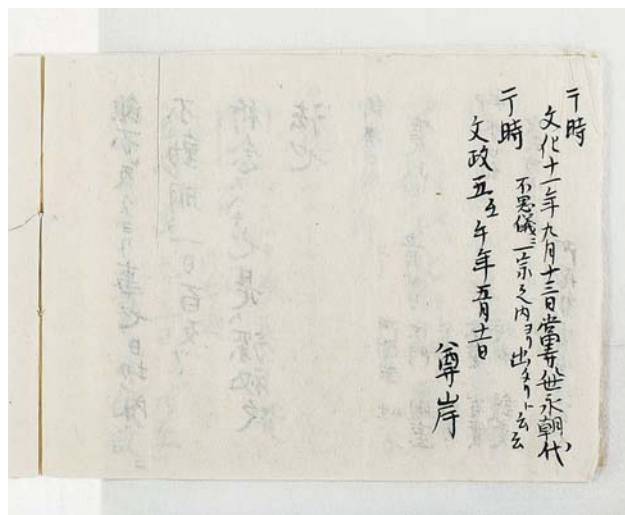


写真 13

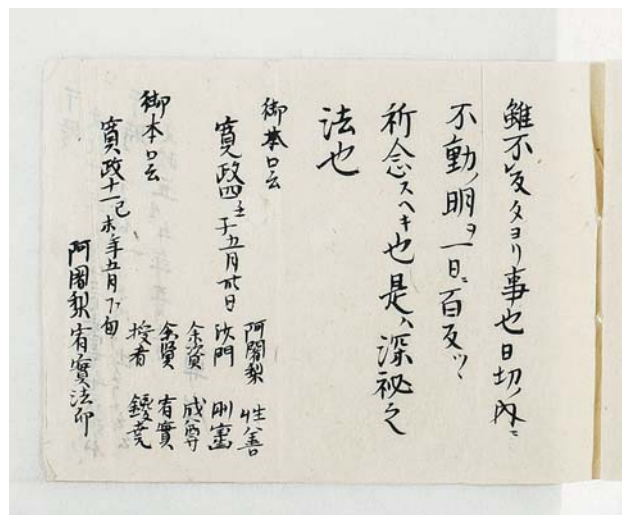


写真 12

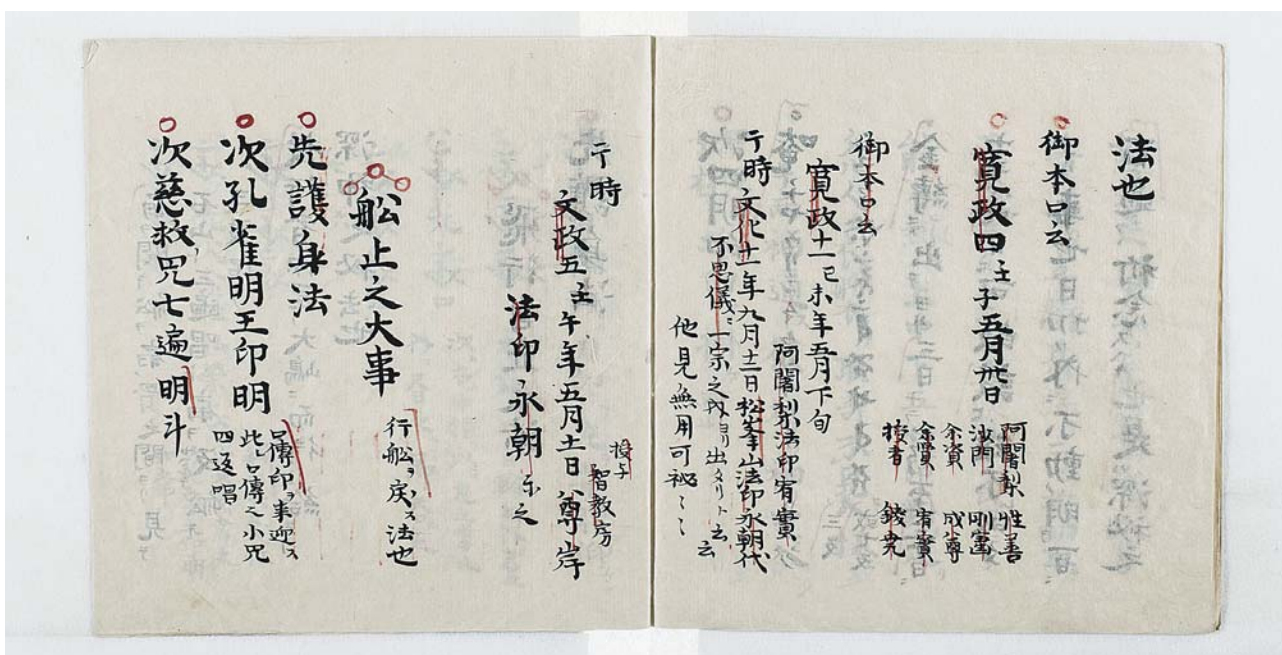
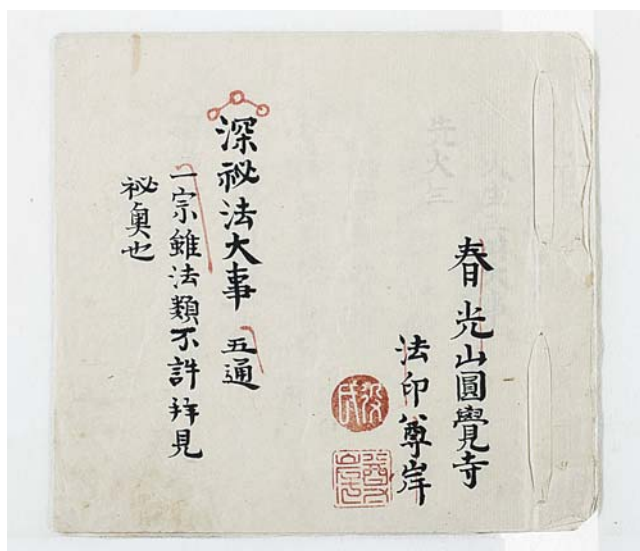
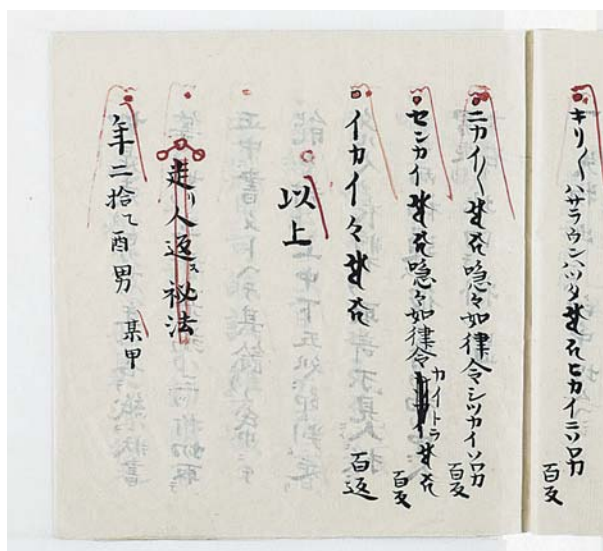
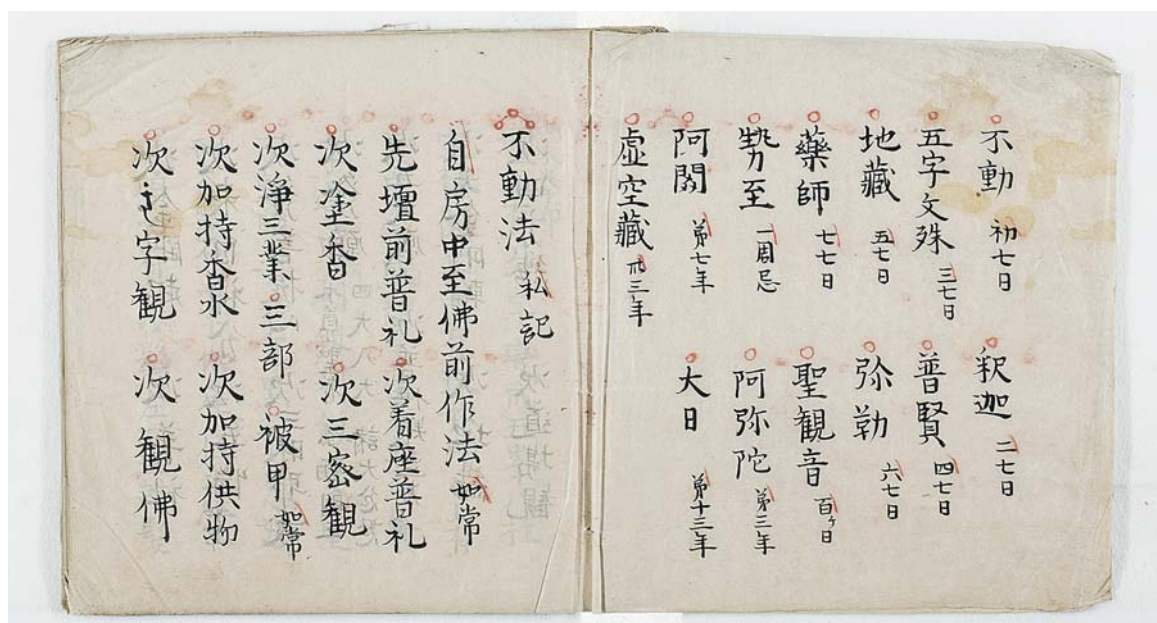
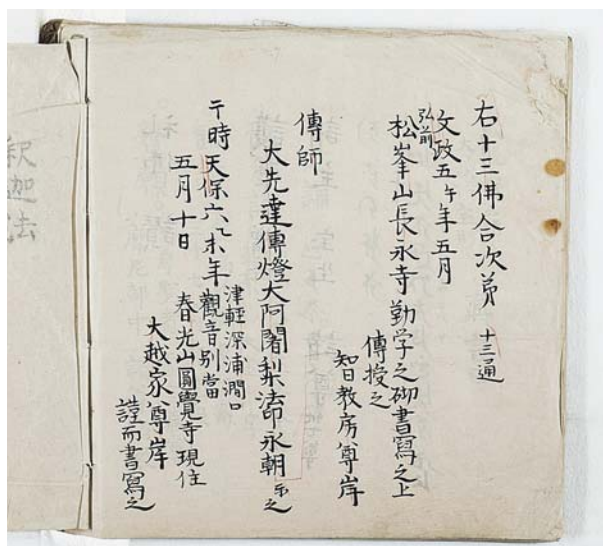


写真 14







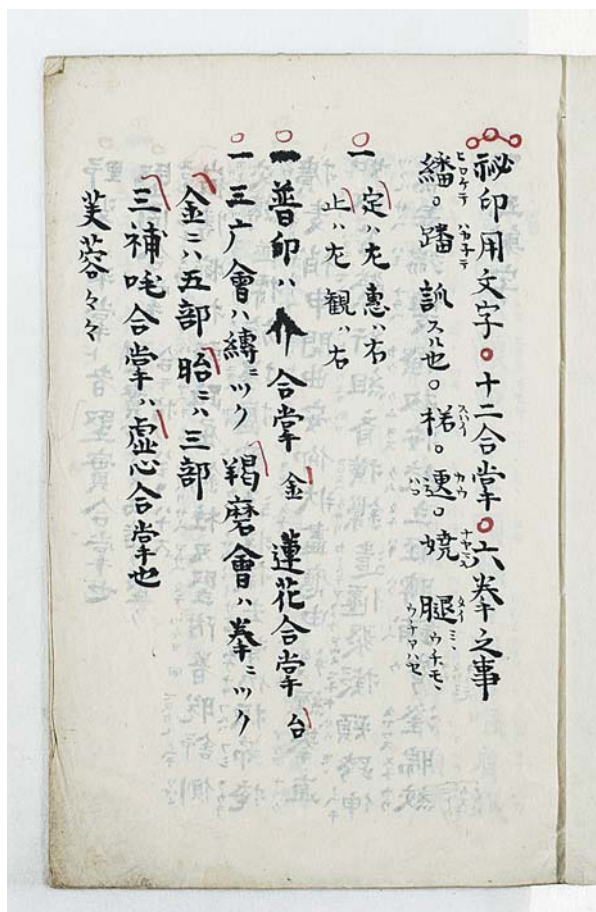


写真 21

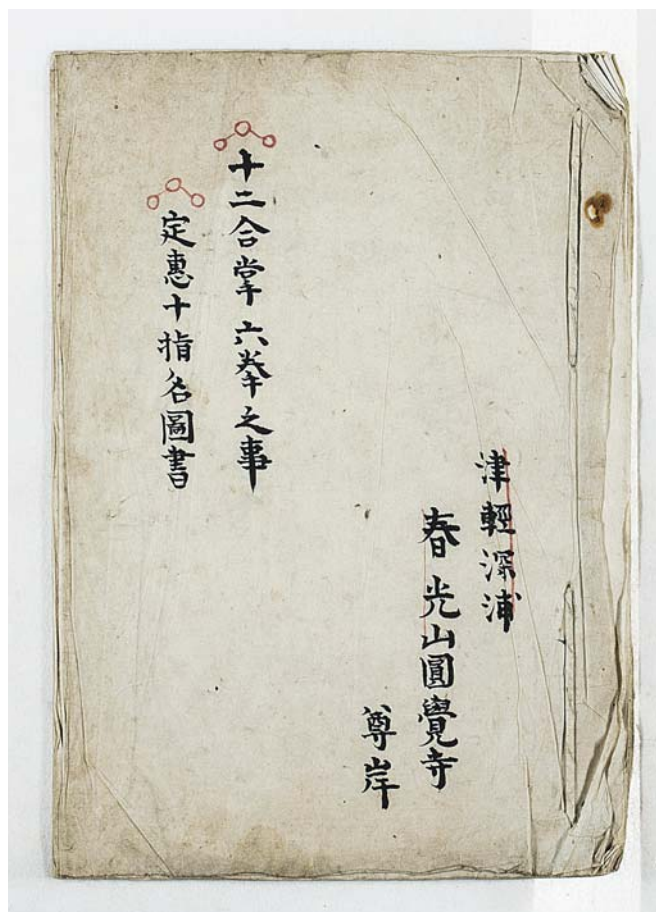


写真 20



写真 22

## 〔資料〕「国日記」の記載による

### 最勝院二十七世鑲堯の経歴

- 1、寛政三年（一七九一）九月二〇日条  
・宝成院（玄識房鑲堯）が大善院へ転院。以後大善院が鑲堯である。  
※典拠は「金剛山最勝院関連箇条抜粹一覽」による。
- 2、寛政四年（一七九二）  
・四月一七日程：最勝院看主申出候、云々  
・四月一九日程：大善院申出候、云々  
・四月二五日程：最勝院看主申出候、云々  
・四月二八日程：最勝院寺庵大善院先頃申立候、云々  
※最勝院看主は大善院の事だという。典拠は「金剛山最勝院関連箇条抜粹一覽」による。最勝院住職二五世朝胤は継ぎ目のお礼のため上京中である。
- 3、寛政六年（一七九四）四月二七日程  
・大善院、去（年）一二月に大和小池坊へ御暇を取り（修行のため）罷り登り、一昨二五日程下着。  
※大善院が大和小池坊へ登る旨の関係記事は、寛政五年（一七九三）一〇月四日程にあり。
- 4、享和元年（一八〇一）八月八日程  
・久渡寺無住につき、大善院が移転。鑲堯が久渡寺の住職となった。
- 5、文化四年（一八〇七）一〇月二八日程  
・久渡寺の弟子で最勝院の寺庵普門院が、横内村の常福院の住職となる。  
※普門院は去る申年（Ⅱ寛政十二年（一八〇〇））に出奔したが、去年（Ⅱ文化三年）の瑞祥院（Ⅱ初代藩主為信）の二〇〇回忌法会の大赦で罪を許され、久渡寺に引き取られて真面目に修行をし

ていたため、このような抜擢になったようである。

- 6、文化五年（一八〇八）十一月九日程  
・久渡寺が無調法の儀があり隠居させられる。当初は最勝院の寺庵の宝成院で謹慎していたが、横内村の常福院に移される。  
※久渡寺と常福院の師弟関係によるものか。また、ここで隠居になったので、その後、最勝院二七世に昇りつめることができたか、少々疑問もでてくる。但し、大赦があれば、隠居から別の寺の住職に就任することは可能である。こういう例を「国日記」で見た事あり。
- 7、文化六年（一八〇九）二月二八日程  
・久渡寺が無住であるので、救聞持堂守が移転する。救聞持堂守には宝成院が移転。
- 8、文政二年（一八一九）五月七日程  
・最勝院二十五世朝胤が上京中のため、四山（百沢寺・国上寺・橋雲寺・久渡寺）の輪番で最勝院の寺務を取るように命じられたが、不締まりのため大善院に任せられた。しかし、大善院も多忙なため不締まりの部分があり、四山へ一月に二度、最勝院に赴き寺務の取締をするよう、寺社奉行から口達が出る。  
※四山の序列は上記の順である。
- 9、文政二年（一八一九）九月二五日程  
・最勝院二十五世朝胤が上京中に死去。朝胤は勧修寺の御用で上京中であつた。
- 10、文政三年（一八二〇）二月二日程  
※最勝院の資料では、なくなった日は同年八月五日とある。  
・百沢寺が最勝院住職（二六世朝慶）に、国上寺が百沢寺住職に、橋雲寺が国上寺住職に、久渡寺が橋雲寺住職に、大善院が久渡寺住職になる。



※真言五山の住職がすべて新任となる。この時までには鑲堯は隠居を免ぜられて復権した模様。

11、文政五年（一八二三）

・当時、大円寺の住職であったことが判明（深浦・円覚寺の二四世住職尊岸の慶応元年（一八六五）に書いた資料による（「東奥日報」二〇一九年七月九日付朝刊、二二面の記事）。

・その後、国上寺の住職になったと推定される。

12、天保二年（一八三一）四月一五日条

・最勝院二六世朝慶が隠居。

13、天保二年（一八三一）六月一日条

・国上寺が最勝院住職に、久渡寺が百沢寺住職に、橋雲寺が国上寺住職になる。

※国上寺住職とは鑲堯であり、最勝院二七世となる。

14、天保四年（一八三三）七月一五日条

・最勝院と久渡寺から、来る午年（Ⅱ天保五年）三月に、弘法大師千年忌にあたるので、法会を執行したい旨の申出があり。

15、天保四年（一八三三）一二月三日条

・最勝院二七世鑲堯が大病につき、藩から藩医三上道周と伊崎三隆が派遣される。

16、天保四年（一八三三）一二月八日条

・最勝院二七世鑲堯が病死。

※鑲堯が大円寺の住職になった時点を確認はできていないが、文政五年当時には同寺の住職であったことは確認できた。その後、時期は不明であるが、国上寺の住職になり、天保二年に最勝院二七世に昇り詰めたのである。最勝院の住職になるには、四山の住職でなければならぬことは確かである。

（二〇一九年七月九日 文責 福井敏隆）